

巻頭言

会長を拝命して 一名は体を現す

(財)高度情報科学技術研究機構 会長
田中 俊一



4月1日付で(財)高度情報科学技術研究機構(RIST)の会長を拝命しました。よろしくお願い申し上げます。

これまでは12個の漢字が並んだ当財団の名称について深く考えたことはなかったのですが、「名は体を現す」の例もありますので、会長に就任した機会にその意味を改めて考えてみました。まず「情報」ですが、一般には巷に溢れる種々雑多なニュースや知識までも含まれているようですが、「情報科学」と科学の二文字がつくと全く意味が違ってきます。広辞苑では、科学とは体系的で実証可能な知識であると説明されていますが、これに従えば情報科学とは情報を体系的で実証可能な知識にすることと理解できそうです。

次に「高度」です。この高度は「高度な情報」なのか、あるいは「高度な情報科学技術」かで、少し意味が違ってきます。高度な情報とは具体的に何を指すかですが、体系的で実証可能な知識として処理することによって新たな知見や技術を生み出すことができるようなデータとか知識ということでしょうか。言い換えれば、情報科学の対象として扱うべき情報が高度情報であると理解しても大きな間違いはなさそうです。一方、高度な情報科学技術はどうでしょうか。コンピュータという高度な技術を使って、より価値のある情報(知識)を生み出すことと理解するのはやや単純すぎるような気がします。当財団の実態はその辺りにあるといっても間違いではなさそうです。

12個の漢字を並べた名称は、一般的にはなかなか馴染みにくいものがありますが、こうして一つ一つの意味を考えることで、平成7年に(財)高度情報科学技術研究機構を発足させる時の関係者の思いが、12個の漢字を冠した名称に込められていることを理解できたように思います。「名は体を現す」といいます。名称に相応しい活動を行うことが当財団の使命であり、将来を拓く道であるのかと改めて認識をした次第です。

産業革命以降、科学技術は機械化を中心としたハードテクノロジーを追及し、発展してきましたが、オイルショックや公害の例に見られるように量の拡大によって豊かさを追求する科学技術(ハードパス)には限界があり、21世紀はソフトテクノロジー(ソフトパス)が重要な役割を果たすことになるという議論が1970年代以降から1980年代にかけて盛んに行われました。その背景には急速に発展してきた情報技術(ソフトテクノロジー)の存在が意識されていたし、このソフトテクノロジーを代表するのがコンピュータの発達でした。因みに地球温暖化問題はハードパスの行き過ぎによって生じた軋みで、アルビン・トフラー流に云えば産業革命以後の強大なハードパスの波である第2の波を情報技術に代表される人間、自然に価値をおく第3の波(ソフトパス)

がどのように乗り越えるかという現代の人類社会に与えられた命題であるということになります。こう考えると、地球温暖化問題で地球シミュレータを使った情報科学が大きな役割を果たしてきたのはある意味で当然のこのように思われますし、情報科学技術は膨大な情報を処理するだけでなく、そのことを通じて次の時代、ソフト化社会を構築する科学技術であるということが想像できます。

計算科学が実験、理論と並ぶ第3の科学と呼ばれるようになってから暫く経ちますが、社会一般にはまだ計算科学が第3の科学であることが定着しているようには思われません。計算科学が大型コンピュータを使った大量情報の処理技術として、つまりハードテクノロジーの一分野に留まる限り、第3の科学の地位を確立することはできないかも知れません。計算科学が人類社会の求めるソフトな社会の構築に寄与すること、計算科学が大量情報処理技術から人類社会が求めるソフトサイエンスに進化した時に、真に第3の科学としての地位が確立されるのではないかと推察します。当財団がその一翼を担って活動することは大きな意味があります。

昨年秋から独法や公益法人を対象とした事業仕分けという強大な嵐が吹きまくっています。当財団は事業仕分けの直接の対象にはなっていませんが間接的影響は大きく、財団の将来が影響を受けることは避けられないような気配です。まさに、嵐の時代の到来というのでしょうか。このところ幕末から明治維新にかけての群雄がもてはやされているのも、混沌とした現代社会の一面を表しているように思います。しかし、この混沌もハードパスとソフトパスの闘ぎあいの中で生じているという見方も出来ますし、いずれはハードパスとソフトパスが最適に共存する社会に向かって行くに違いありません。

会長就任後に、当財団は「高度な情報科学技術」の蓄積とそれを発展させる人材を有していることを学びました。大変厳しい時代ですが、当財団が情報化時代（ソフト化時代）を担う組織として、さらに原子力データセンターの伝統を継承する原子力情報のシンクタンクとしての将来を拓くため財団の役職員と協力して微力を尽くしたいと思います。

関係各位の一層のご支援とご協力をお願い致します。